No.26

古高取通信

平成29年 7月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1．活動の拠点を創る
2．古高取の知識を深める
3．古高取の魅力を伝える
4．次世代へつなげる

古高取を伝える会会報

目次

古高取の魅力を伝える　・・2
平成二十九年定期総会　・・2
活動の記録　・・・・・・4
なんでも掲示板　・・・・・5

直方歴史資料館を待望する

直方市は遠賀川に育まれた、自然と文化豊かな町であり、次世代に引き継ぐ多くの資産を抱えています。

残念なことに歴史資料館がなく、収集された近代遺産や埋蔵文化財の発掘出土品等の、膨大な資料の集中的な管理がなされてなく、散逸する恐れのあるものも少なくありません。

直方の地で生を営んできた先人たちの残してくれたこれらの資料は、町の誇りであり、これらに触れることで私たちの心を豊かにしてくれるでしょう。

資料館が出来て飛躍的に文化都市化するというものではないでしょうが、直方市民にもたらす精神的な充足感は計り知れないものがあるに違いありません。

少々お金がかかるとしても、長い目で見れば十分なお釣りがくるのではないでしょうか。大人だけでなく、子供の将来のためにも是非資料館を作っていただきたい。

隅田知明

古高取の魅力を伝える

小学生と高取焼づくり

直方市立中泉小学校　宇留嶋 政浩

今年も、小学校6年生の茶碗づくりが行われました。

古高取を伝える会の皆さんの御助成でこのような貴重な経験ができることは、ありがたいことです。

今回も授業参観として、保護者の方にも参加していただきました。子どもたちは、指導の皆さんの話を聞いて一生懸命に作り上げ、自分の出来栄えに満足していたようです。

写真は、出来上がった茶碗を仕上げていただいているところですが、いい作品に焼きあがるのを心待ちにしています。

この茶碗は、卒業式前の「お茶会」に使われます。自分の茶碗でお茶をたて、緊張の中飲んでいる様子が今から想像されます。

大半の子どもたちにとっては、生まれて初めての「お茶会」になることでしょう。指導は、中泉校区の地域の方々が毎年行ってくださいます。

さて、学習としてこの取組を考えてみると、多様な意味づけができるでしょう。

社会科の学習としては、室町文化の中で「茶の湯」の発展、秀吉の時代に「朝鮮から伝えられた焼き物の技術」の記述があります。

この内容と焼きものづくりをつなげる解説が必要になります。本校では、「直方の宝『古高取』のDVD」の視聴のほかに、千利休や神屋宗湛を登場させた事前学習（プレゼンテーション）を行いました。

「総合的な学習の時間」として、直方の歴史を学び、伝統文化を大切にする心を育てる学習につなげることにもなっています。また、図画工作科の「造形遊び」の活動として、表現の工夫や技能の習得にもつながっています。

このように、教育的な価値を整理し、しっかりと教育活動の中に位置づけることが学校現場には求められていると思います。そのことで、この活動は、確固たるものになり、継続されていくことと思います。

茶道の道具としての価値

これは、中国で焼かれた博多文淋（はかたぶんりん）という茶入れです。持ち主は、博多の商人「神屋そうたん」と言います。

この茶入れをほしくなった秀吉に対し、そうたんは、「日本の国の半分とならば交換してもいいですよ」と言って断ったそうです。

平成二十九年定期総会

平成二十九年五月二十七日（土）
場所：直方市中央公民館二階
第二学習室
記念講演：宮原隆窯 宮原隆次氏
「陶工として生きる」

平成二十九年度の定期総会は、活動報告・決算報告・活動計画（案）・予算（案）について滞りなく承認いただきました。

今年度も活動の四本柱（一・活動の拠点を創る。二・古高取の知識を深める。三・古高取の魅力を伝える。四・次世代につなげる。）に基づき活動し、諸団体・行政とも協議して会発足十年目に向かう年として具体的に行動に移す年にしたいと思います。

末松登志子

陶芸家の宮原隆次さんをお迎えして

古高取を伝える会　副島 邦弘

平成二十九年度定期総会の記念講演には、日本工芸会正会員で、直方市永満寺に窯を持たれている陶芸家宮原隆次氏をお迎えして『陶工として生きる』と言うテーマでお願いした。

宮原氏は、昭和二十七年に直方市で生まれ、小中高を当地で過ごされた。昭和五十三年に近畿大学工学部建築科を卒業され、福岡市の建築会社に就職された。その後、陶芸家の道に進まれた。

昭和五十六年、西部工芸展で銅賞を受けられ、日本伝統工芸展にも入選された。これを皮切りに、毎年公募展に入選や入賞されている。

平成二十二年に西日本陶芸展で文部科学大臣賞を、平成二十五年には西部伝統工芸展で日本工芸会賞を受けている。

平成四年に福岡で初個展を開かれ、以後、各地で開催されている。

昭和六十二年、直方市感田にて自分の窯を開かれ、十年後の平成九年に現在地の直方市永満寺宅間に移築されている。移築の理由は、周辺に住宅地が広がってきたためと、薪が焚けなくなったためであった。

講演は、先生の陶工生活三十四年を振り返っていただき、初期の作品から現在の作品までの陶芸技術の変化が見られるように節目節目の作品を並べ、作品の説明を付加しながら繙(ひもと)いていただくことを主題とした。

先生の”やきもの“との出会いは、小学五年生の時の図工の時間、粘土を使って手びねりで急須を作ったことにはじまる。祖母の煎茶道具の煎茶碗を壊したことがあったらしいが、詳しくは覚えていない。高校時代には親からバイクを買ってもらい、上野・小石原・唐津までの窯元めぐりを行った。”やきもの“の原点を観察することになった。大学は定時制で五年間で卒業ということで、昼間に時間の余裕が生まれたので、バイクで各地のやきもの窯元や美術館等をめぐり”物を見る目を養い“実物からの感覚を持つことができた。

大学卒業後、福岡市の建築会社に就職し設計に携わっていた。その頃は福岡に下宿していたので一年あまり直方に帰らないと親が心配したため、直方市勤労青少年センターで開催されていた”水曜陶芸教室“（毎週水曜日の夜七時～九時）に昭和五十四年の春から通い始めた。この時の講師が石原祥嗣先生で三年間通い続けた。四年目に入るとき、指導の石原先生が退くこととなり、先生から”おまえがやれ“といわれ引き継ぐことになった。そのころ陶芸に目覚め、会社を辞めてフリーターとなって陶芸に力を注いだ。昭和五十八年の春に能間瀧次先生の”やきもの道具一式“を安価で譲り受けた。その中には窯も入っており、いわゆる炭化窯に改造されていた。これを使用して、西部工芸展と日本伝統工芸展に作品を出品した。その当時は置物しかつくれず、日常雑器類まで手を出していなかった。

西部工芸展に出品した「炭化木瓜壺」に銅賞をいただき、日本伝統工芸展も入選したので、壺形のものには自信を得た。公募展に出品して技量を高めることが評価に繋がると考えたわけで、その後は毎年出品することとなった。炭化壺については、小振りのものを作ってくれと、東京の『黒田陶苑』より注文が舞い込んだ。明治屋産業の会長の応援を受けて、感田に薪窯を築いた。この窯で十年間に亘って、灰釉を中心に、鉄釉・焼き締め・サビ等の技法を入れて、作品

を製作した。基本は灰釉で、上野釜ノ口窯の陶片を原点と考えている。薪は松材を用いて粘土の赤土を炭化させると黒土と、鉄釉とサビ・灰釉の窯変えを薪窯でどう表現できるかを作品に込めて製作し、公募展に出品し、西部工芸展では毎年入選している。薪窯の窯変を通して、平成九年に現在地の永満寺宅間に移動した。

この間に新しい知見を得るため、平成八年から数回に亘って、中国の陶磁器の窯である景徳鎮や北宋の影青として越州窯・建窯等の窯の現状と博物館等を巡って、見る目を養った。その中でも磁州窯の製品をケース越しに鉄釉と白化粧

の技術に目の覚める思いをもった。これを現代風に自分の仕事に取り入れることを考えた。新築した窯を持って電気ガマと油ガマ等で、窯変のおもしろさではなくて、古器物の中に新しい感覚・技術が残っているのを再び光をあてることを考え、白化粧土と鉄釉で勝負をしてみることとした。それを公募展に出品してレベルを計った。

宅間の地は、七十年前造成して宅地のままで、原野であった。竹を切りながら入ると斜光が竹の間から入り幻想感があった。土木会社に造成を依頼して建物を建てて、新窯ではなくて、電気ガマと油ガスガマを併用するように設置した。

河南省磁州窯系の技術を入れた作品を考えてみた。素地に白化粧土を使用し、鉄釉を加味させて、竹影の斜光を作品としたいものと考えられた。面と稜線の組み合わせ、面白さに曲線を入れて、白でもより清純な乳白色を究極の色とし多角形の面の存在の作品等を後半に入れて、その技術の変化と作品を見せていただいた。

宮原氏の作品は、炭化の技術を石原先生に、能間先生からは炭化カマとそのカマ焼を、手びねりからロクロ引き、そして焼き締め技術を習得された。石原先生の教導

等を得られ今日に至っている。

人との出会い、物との出会いを大切に、人からしていただいたことに感謝することを強調され、まとめとされた。

また、この機会をいただいて、自分の作品を見直すことができたことについて、本会に感謝したいと結ばれた。

活動の記録

●子供焼物教室

〈平成二十九年四月～七月（前期）〉
場所：直方市内の小学校

平成二十九年度の小学校六年生対象子供焼物教室は、前期の八校が終了しました。後半は、九月から始まります。

●高取焼基礎研修講座

〈平成二十九年七月〉
場所：えみくる（直方中央公民館横）

平成二十九年度の「高取焼基礎研修講座」が始まりました。今年度は「千利休の生涯」がテーマです。皆様、どうぞ御参加ください。

●鞍手高等学校焼物教室

（地域対象焼物教室）
〈平成二十九年四月十八日（火）〉
場所：鞍手高等学校

鞍手高校茶華道部の茶碗づくりが、四月十八日（火）行われました。

六月三日（土）、創立百周年記念鞍高祭が行われるにあたり、お茶会の記念事業として、古高取焼の抹茶わんを作りたいという要望で実施されました。

土を操って作りたいものを作るという、陶芸のおもしろさを感じつつ、しかしながら土を思い通りの形に仕上げるという至難の業に悪戦苦闘しながら、自分だけの作品を作ることに集中し、ある意味での癒し体験にもなったのではないでしょうか。

毎年、市内十一小学校の六年生の焼物教室に携わって九年になりますが、小学生と違って、さすが高校生。丁寧な手さばきには感心しました。

私どもの焼き物教室は、焼き物を作るという技術を伝授するだけでなく、直方で生まれた古取焼の歴史、変遷等を後世へ、繋いでいくという大きな使命感をもっていることを理解していただいたと確信しました。

素焼き、釉薬掛け、本焼きという工程の説明に、ギラギラと輝く真剣なまなざしが印象的でした。窯の中の作品は、神のみが知りえる神秘的なもの。

伝統を受け継ぐ。大切な時間を過ごす。

マイ茶碗で、お茶を楽しみ、その茶碗の十年後、数十年後に思いを馳せていただきたいものです。

六月三日の記念文化祭での展示、焼物教室、お茶会は大賑わいでした。

物を見る確かな目を養い、物を大切に使いこなすことを体感してほしいです。

柴田ムツ子

●鞍手幼稚園焼物教室

（地域対象焼物教室）
〈平成二十九年六月四日（日）〉
場所：鞍手幼稚園
参加：五十五名

今年も年長組の子供たちが焼物教室を体験しました。スムーズに茶わん作りが始まりました。お父さん、お母さん方が程よく、子供に手を貸したり、アドバイスをしたりしていましたので、私たちスタッフはできるだけ手を出さないようにしていました。

お父さん、お母さんが焼物体験教室に参加されている方が多かったようです。これも、鞍手幼稚園が焼物教室を続けてこられた成果かなと思います。

後半、熱が入ってついつい手を出しすぎてしまう様子も。

でも、童心に返って何かに夢中になるってこと素敵ですよね。

一方、子供たちは出来上がった茶わんに絵やイニシャルを描くことがとても楽しかったようです。

親子での思い出がつまったお茶わんの出来上がりが楽しみですね。

倉田豊子

なんでも掲示板

●高取焼大茶会

〈平成二十九年四月三十日（日）〉
時間：十時～十五時
場所：直方市古町商店街・明治町商店街内

今年四月三十日、駅前から東に向かう明治町商店街、それに交差する古町商店街に於いて「ちくぜんのおがた高取焼大茶会」を催しました。これは一昨年十月に直方市が主催した官兵衛プロジェクト「高取焼内ケ磯開窯四百年祭五千

人茶会」が市民の皆様や両商店街の方々非常に好評で、亡くなった向野前市長もこんなに華やいだ商店街は久しぶりだね、と言ってもらえた事もあり、直方の伝統文化でおもてなししたい、中心市街地活性化のお役に立てればと、思い立った次第です。

今回は民間団体、直方郷土研究会、ボランティア直方を語る会「とおれんじ」、茶道裏千家、茶道表千家、茶道遠州流、小笠原流煎茶、古高取を伝える会、泰山木の会、筑前城郭研究会、直方市観光物産協会、植木の三申踊保存会、直方日若踊保存育成連合会、明治町商店街協同組合、古町商店街振興組合の十四団体で組織した実行委員会です。

直方の歴史を知ってもらい、昔直方は黒田五万石の支藩だった、立派な城を持っていた、鷹取山から名を採った初期高取焼の名品群が作られていた、江戸中期には三申踊りや日若踊りの伝統芸能が芽吹き文化的に華やいでいたことを子供さん達に解ってもらいたいとの思いもありました。否、これが一番かもしれません。

昨年十月から会議を重ね、空き店舗を探し、遠州流の方にはプラチナ茶室での席作りをお願いし、また鞍手、直方、筑豊、竜徳の高校茶道部、また県立大学の茶道部、十二の茶席ができ、筑豊高校には商品物販のコーナーも作ってもらいました。

城郭研究会はもち吉ビルで鷹取城、直方藩主館、福岡城本丸などの展示。古高取を伝える会は十年以上続けている小学六年生陶芸作品展示や陶芸教室、歴史ボランティア直方を語る会「とおれんじ」と泰山木の会はまち歩きツアーで高取焼出土品の説明やレトロ建築物の案内を、そして三申踊り、日若踊りは商店街三箇所で都合十二回踊りを披露し、来場者は市内市外から六千人近くがお見えになり非常に賑わいました。前回が二千二百人だったことからすれば大成功だったといえます。

ただ、こちらの不手際で早い時間でお茶、お菓子がなくなりご迷惑をお掛けしたことが残念です。実行委員長としてお詫び申し上げるところです。

しかし直方という町を知ってもらう良い機会だったと思います。

今後これをどう膨らませていくかが課題だと思います。

実行委員長　河面直人

●あじさい園

（金剛山もととり協議会だより）

〈平成二十九年六月十日(土)～
七月二日(日)〉

場所：金剛山もととり広場

今年はマスコミ等で発信され、連日多くの来園がありました。車の台数は平均して二百五十台、来園者も延べ二万三千人くらいありました。

あじさいの花が色づく頃には雨が少なく、朝夕の水やり作業が加わり暑さとの戦いでした。自然と関わり続けて気づくことは、人の力ではどうすることも出来ない自然の営みの中で生かされていることを思い知らされます。

里山の木々、岩清水の流れの音を聞きながら咲いたあじさいも役目を終え来年に向けて花を切り取る作業が始まります。一番つらい作業です。

全てにありがとうです。

末松登志子

〈編集後記〉
いよいよ夏本番です！皆様、体調に注意して頑張りましょう。

「古高取通信」会報・NO26
〈発行〉
古高取を伝える会
〈発行日〉
平成二十九年八月四日
〈現在の会員数〉
正会員　五十四名（五十四口）
賛助会員　十八名（二十七口）
団体　一団体（一口）
〈マイ茶碗の数〉
五千二百七十一個
〈事務局〉
〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL　〇九四九(二三)一三一一